

# 昭和28年度兵庫縣生物学会第六回總會の概要報告

井 上 三 義

兵庫県生物学会第6回総会は28年5月9、10日の両日にわたり氷上郡柏原高校第二講堂で開催された。当日の参加者は約150名近く上る盛況で交通不便の土地での総会としては思いもかけぬことであつた。以下総会当日の概要を報告して諸氏の参考に資したいと思ふ。

9日午前9時半開会、森会長の開会の辞に続き室井理事より経過報告、渋谷理事より会計報告あり、次で松山確郎会員を議長として議事に入り来年度の総会開催地決定等について意見交換あり。10時半より会員及び柏校生物班員の研究発表あり。何れも傾聴に値する興味ある研究を紹介された。発表題目及び要項次の如し。

- 1 丹波地方におけるカエルに就いて(11種のカエルについて分布、卵の形態、産卵期、産卵習性についての精密な観察の発表) 篠山農高 樋口繁一氏
  - 2 マルタニシの日週活動について(マルタニシの日週活動が主として水温によつて影響されているとの実験的研究の発表) 柏原高校生物班員 細見彬文君
  - 3 東部瀬戸内海産の有孔虫(大阪湾、播磨灘を中心とする44種の有孔虫の分布研究) 須磨高校 安藤保二氏
  - 4 氷上郡産スズメガ科一覽(氷上郡産27種の略説とその幼虫の区別点特に2、3の稀種についての紹介) 柏高山本義丸氏
- なお会場には山本教官を中心とする柏高生物班の収集せる氷上郡産昆虫標本約2500種(頭数約1万2千頭)が陳列され場内に光彩を放つていた。
- 5 屋久島の陸産貝類(屋久島旅行談と同島陸産貝類目録の紹介) 甲陽高校 東 正雄氏
- これで午前中の行事を終り昼食にうつる。

講演 (午後1時半より)

兵庫農大岩田博士より「蜂の習性の進化」と題する講演を願つた。要旨次の如し。「生物の形態に関する進化過程は化石の研究からうかがふことが出来るが、習性の進化過程は現存の昆虫の生態を広く究めて比較考察することによつて進化のプロセスを推定し得る。蜂類の巣の作り方や幼虫の食物や、あるいは産卵行動等の比較から蜂の進化の跡を推定することが出来る」と精細な図を用いて説明された。ペンと紙そして鋭く辛棒を使い、観察によつてなし得る生態研究の分野に取残さ

れた部分の在ることを知らされ感銘深いものがあつた見

午後3時より明治乳業及び製紙工場の見学をなす。午後5時旅館霞月樓に引上げ夕食をすまし午後8時半より夜間の部にうつる。

夜間講演

1 根の構造 京都大学 田川博士  
根の成長点附近の構造を説明され、ここから第一期の根の組織が如何に分化してゆくかを下等植物から高等へと順次紹介された。次で第二期組織の生成を根と茎の中心柱における木部と節部の配列の相違と、その配列から根より茎に移行するところで、どんな形式で移り変つて行くかを図表によつて説明された。最後に根の分枝と茎の分枝を比較してその相違点を明示された。

2 稲と麦の根の構造と生理 兵庫農大 浜田博士  
稲の根の発生に就いて種子根と冠根のあること。発芽後3、4週間で5、6本の種子根が胚より発生するが、やがて上方に冠根が出来て、これだけが残つて数十本から数千本となつて生育が続く。この根の生長は出穂期に最高となる。根数最高となる地温は30°Cで根の酸素消費量は生長の進むにつれて増大し、出穂期より7~9日前穂パラミ期に最高。根の浸透圧蔗糖0・3~0・4モル濃度。なお各種の土壌、深耕不耕土等での稲と麦の根群の生長状況について実例を多数の図によつて解説された。

3 葉蜂の幼虫について 篠山農大 奥谷助教授  
最も原始的な蜂(葉蜂)についての分類とその生活史について説かれ、ことに幼虫についての知見が非常に少なく将来研究の余地が多々あることを示唆された。10日午前8時木の根掘前に集合し3台のバスに分乗して新緑の鐘ヶ坂へ採集行。来会者百余名。植物は田川浜田両博士と川崎、室井、細見、樋口会員により昆虫は岩田、奥谷両先生はじめ山本会員によりそれぞれ指導された。イワトラノオ、タニイヌワラビがあり、ミヤコアオイの小群生地で明石高校渋谷氏がギブテウの卵を採集され新分布地を加えられたのは大収穫であつた。

追入金山鬼の架橋を経て上小倉に下り午後2時解散す。終りに本総会を開くに当り森会長、室井、渋谷理事はじめ郡内会員、柏校生物班員の絶大な御尽力に感謝すると共に、本郡の自然研究に刺激を与え、研究の機運を醸成された学会にお礼を申し上げて筆をおく。